

鷗外はブランデンブルク門の彼方に凱旋塔を見なかったのか

——『舞姫』における「目睫の間」の「景物」をめぐって——

神山伸弘

一 はじめに

森鷗外の『舞姫』にベルリンのウンテル・デン・リンデン (Unter den Linden) とブランデンブルク門 (Brandenburger Tor)、噴水、凱旋塔 (Siegessäule) に関わる叙述がある。すなわち、ウンテル・デン・リンデンの西端とみられる「雲に聳ゆる楼閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔て、緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出たる凱旋塔の神女の像⁽¹⁾」と鷗外は描いている。

平凡な一読者であれば、この表現それ自身にはいかなる難解な点もない、と言って許されるだろう。すなわち、読者は、ある「処」に身をおいて、目前に噴水を、遠くに門を眺め、さらにその門の彼方に緑樹と神女の像を想像することになるだろう。

しかしながら、このテキストが国文学者の手にかかる、きわめて深刻な問題を惹き起こすことになる。問題の所在を端的に示せば、鷗外は、このような諸景物（噴水・門・神女の像）を感性的に「目睫の間」に目撃することなく、先ほどのテキストを編んだのではないか、という嫌疑がかけられてしまうのである。

第一に、鷗外の目撃したウンテル・デン・リンデンは、『舞姫』の叙述のごとくでない、という説がある。中井義幸は、『鷗外留学始末』のなかで、『米欧回覧実記』におけるシャンゼリゼの描写と『舞姫』における先ほどの描写とを比較し、次のように言う。「『実記』の「雲に聳ゆる楼閣ヲ連ネ」を林太郎が「雲に聳ゆる楼閣の少しとぎれたる処には」としたのは、ここに隙間を作って挿入をするためで、そこにはめ込まれた「漲り落つる噴井の水」というのは、「晴れたる空に夕立の音を聞かせて」とある通り、根も葉もないそらごとで、ウンター・デン・リンデンにはコンコルド広場の

ような噴水はないのである⁽²⁾。

すなわち、中井は、ウンテル・デン・リンデンの西端にあるブランデンブルク門周辺ではなく、ウンテル・デン・リンデンの東端に——パリのコンコルド広場に対比させる以上そうならざるをえないだろう——噴水が存在しないと指摘することによって、『舞姫』において叙述される「ウンター・デン・リンデンは、『実記』のシャンゼリゼの描写と句々相対応した幻影⁽³⁾」であることの一部を立証しようとしたわけである。したがって、この研究に信を置くならば、ブランデンブルク門周辺の事実を不問に付さざるをえず、『舞姫』からは、その「幻影」こそ得られるとしても、実像は得るべくもない、という理解を引き出すことができそうである。

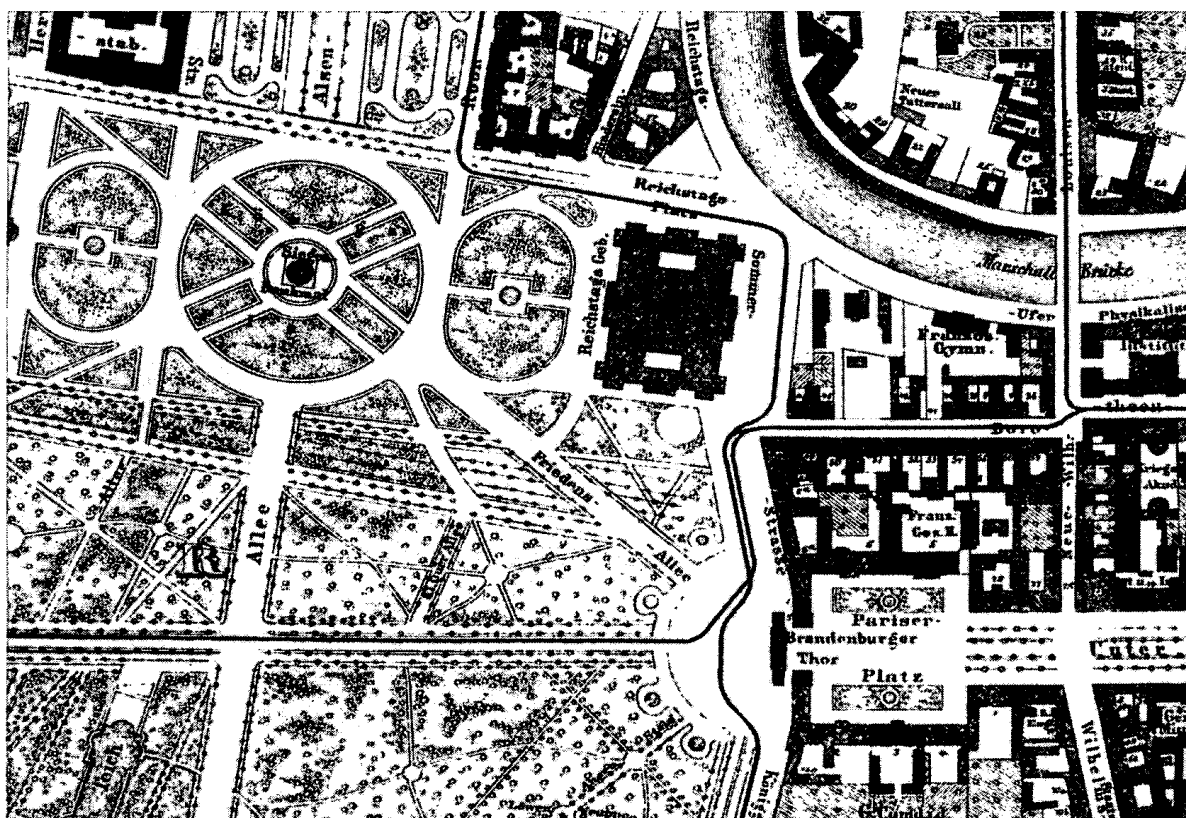
第二に、鷗外はブランデンブルク門周辺を見ることのできる位置で『舞姫』の先ほどのテキストを叙述していない、という説がある。小泉浩一郎によれば、その描写は、「ウンテル・デン・リンデンの東方から、遙か西の外れのブランデンブルク門を臨む地点⁽⁴⁾」からなされていて、そこからの「中景」「遠景」に属するものということになる⁽⁴⁾。(三八)。このため、「ケーニッヒ広場にあった神女像は、ブランデンブルク門の付近からは眺めることはできても、角度の関係でウンテル・デン・リンデンのそれ以外の地点からは、絶対に見えなかったはずである」(三九、傍点神山)とされる。

小泉としては、鷗外が「遠近法」を使用することによって意識的に「主観的契機の浸潤」を図った結果、『舞姫』において「実際には見えないが、作中では見えるもの」(同)を虚構して先ほどの叙述のようになったということ、こうした解釈を担保するために、ブランデンブルク門周辺における「目睫の間」の「景物」の配置をやはり事実として不問に付しうる「位置」を確保しようとしたのだと思われる。そして、この「位置」こそは、『舞姫』にある「物語の意志」という小泉の主張にとって不可欠の神秘的ポイントに変身することになる。

いずれにせよ、国文学者の非「世俗的」(四二) 解釈手法は、事実を超越するところに真骨頂があるらしい。このさい、我々は、事実の超越を目指す文学の——というよりは文学「研究」の——本質を詮議したいとは思わない。この問題で本気のところの議論をするなら、国文学的ではなく哲学的にそれを進めるべきだと思うからである。

むしろ、ここで我々が問題にしたいのは、鷗外が、本当にブランデンブルク門の彼方に凱旋塔を見なかったのか、そして、そのことが『舞姫』の叙述に影響を与えなかったのかということの見極めにすぎない。小泉に言わせれば「野暮の至り」(三八)のこ

とを問題にしたいのである。



図一 ブランデンブルク門周辺の地図（1888年頃）

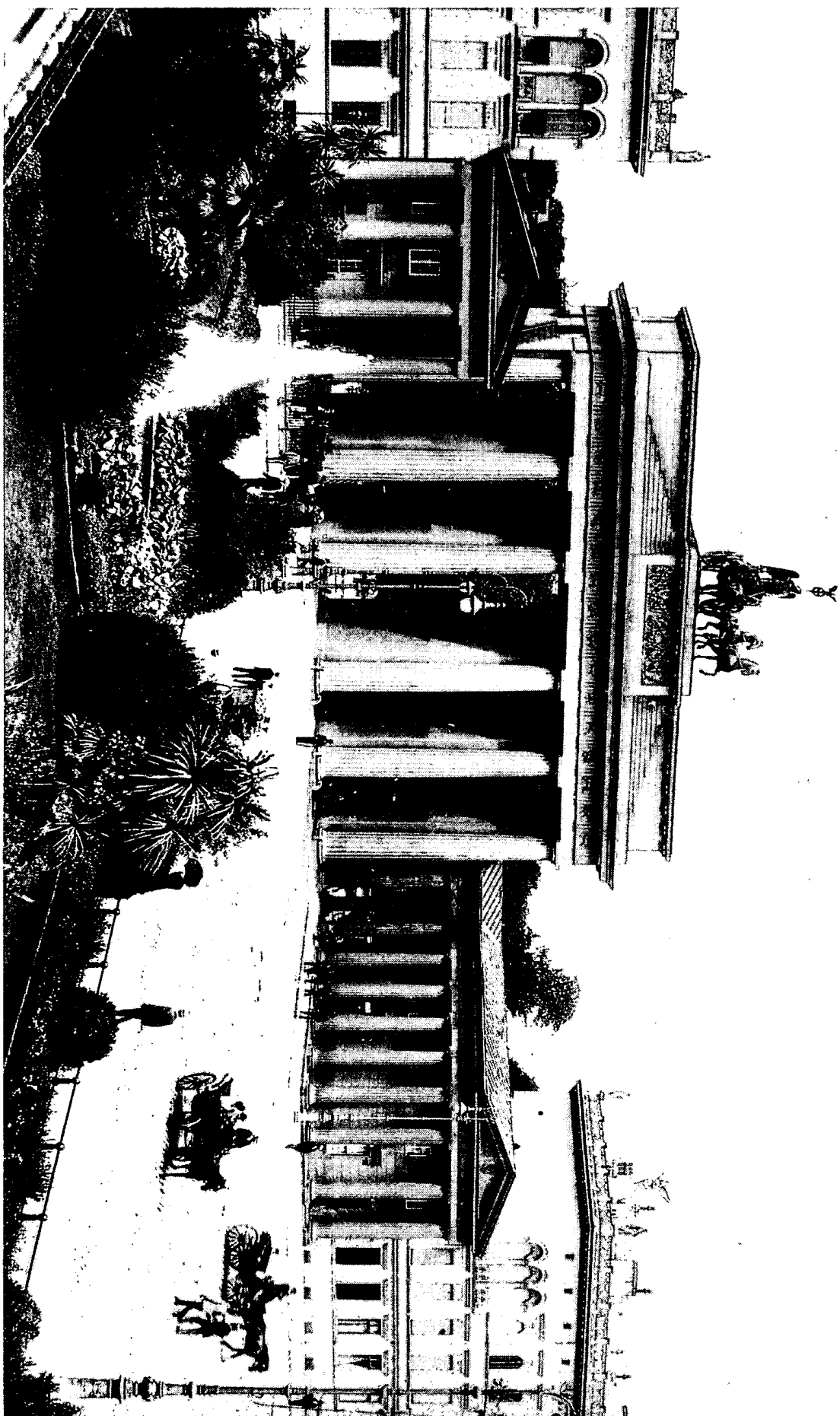
二 ブランデンブルク門の彼方に凱旋塔は見えた

まずは事実を確認しよう。

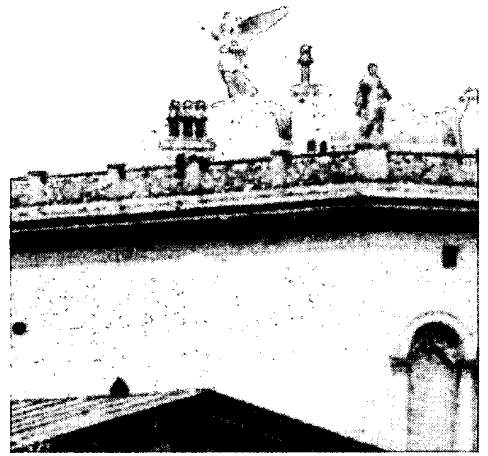
結論的に言うと、鷗外は、ブランデンブルク門の彼方に「凱旋塔の神女の像」を視認することができたのである。

手始めに、諸事物全体の配置状況をつかむため、一八八八年当時の地図でブランデンブルク門周辺がどのようなようになっていたか、見ておこう（図一）⁽⁵⁾。この図の左上に円形の周遊路を有する広場があるが、ここがケーニッヒ広場（Königsplatz）で、この周遊路の中心に凱旋塔（Sieges-Denkmal）がある。そこから斜め右下へフリーデンス並木（Friedens-Allee）が走り、ブランデンブルク門（Brandenburger Thor）へ通じている。この門の内側がウンテル・デン・リンデン西端のパリ広場（Pariser-Platz）となる。図上には、この広場の上下に植え込みの表示があり、それぞれの中央に円形が記されていることが見て取れよう。これこそは、問題の噴水が所在する位置である。

パリ広場からブランデンブルク門を望む写真（図二）⁽⁶⁾を見れば、噴水の存在は疑うべくもない。この写真は、一九〇一年に撮影したものだから、鷗外が滞独した一八八四年から八八年当時の事情と細部は必ずしも一致しないかもしれない。しかし、ここで決定的に重要なことは、門に向かって右隣の低い屋根の外翼に続く三階建の建物の屋上をかすめて、神女の像が伺えることである。この



図二 プラテンマルク門 (1901年)



図三 神女の像（図二部分拡大）

点、さらに納得をうるために、部分拡大図を掲げておく（図三）。

一八八八年版の地図でもそれと思しき記号があるから、鷗外がベルリンにい

た当時に噴水が存在したことに疑いはないはずだが、なお念のため一八八四年当時のパリ広場の写真を掲げておこう（図四）⁷。これは、ブランデンプルク門からパリ広場越しにウンテル・デン・リンデンを眺望したものである。この写真の右側に噴水の半分が映っている。鷗外が初めてベルリンを訪問して以来一貫して、パリ広場には噴水が存在していた。

ところで、慧眼の方は、先ほどの図二の写真をじっくり眺めていくうちに、撮影者の視点が高いことに気づくはずである。撮影者は、広場に面した建物の階上の窓ないしベランダからこの情景を撮影したと思われる。神女の像が三階建ての建物のはるか上空に姿をとどめているのであれば、広場のどこからでもそれを眺めることができただろうと安易な推論で済ます手もあるが、建物す



図四 ブランデンプルク門からウンテル・デン・リンデンとパリ広場東側を臨む（1884年）

れすれに神女の像があることからすると、それではまったく不十分である。眺める者の位置如何では、この神女の像を捉えることが難しいか

もしれない。

パリ広場のどの位置を占めれば、噴水と門を視野に収めつつ神女の像を捉えることができるだろうか。神女の像のほうから門を眺めることができれば目と目が合う形で位置関係を確定することができる。

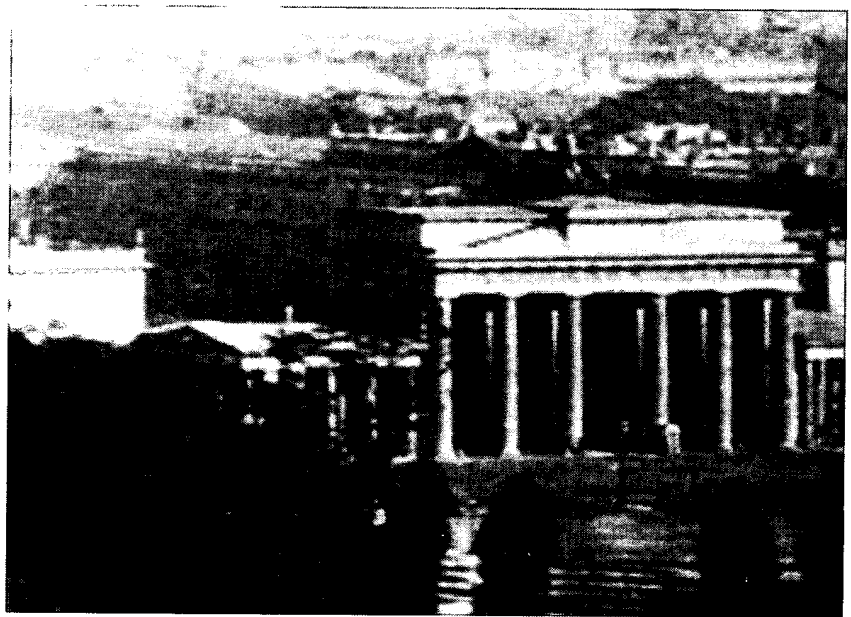


図五 凱旋塔から市街中央を望む（1880年）

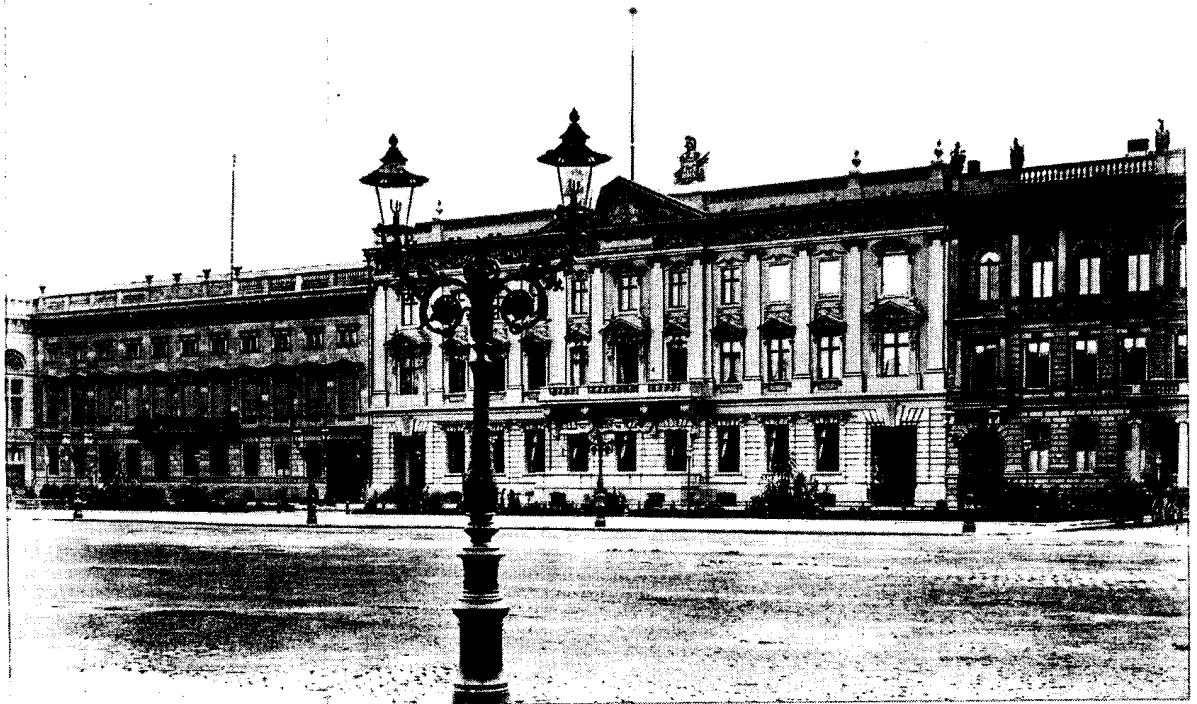
幸い、そのような写真が残っている（図五）⁽⁸⁾。高さ六一・五メートルの凱旋塔は、展望台にもなっていて、ちょうど神女の像が据えられた真下あたりの位置で周囲を展望することができる。⁽⁹⁾

図五の写真は、その展望台から

正面にケーニツヒ広場およびラチンスキー伯邸、右上にブランデンブルク門を眺める一八八〇年撮影のものである。⁽¹⁰⁾ ブランデンブルク門越しにパリ広場を囲む建物を捉えることができる。この部分を拡大すると、ブランデンブルク門に向かって左側にある（次に左にある建物との間で谷間となる）低い屋根の外翼越しに、パリ広場四番地の建物とその前のわずかばかりの地面を捉えるこ



図六 ブランデンブルク門とパリ広場（図五部分拡大）



図七 パリ広場南面（1885年頃）

とができるはずである（図六）。なお、パリ広場四番地を広場および噴水のある花壇越しに眺めておく（図七）⁽¹¹⁾。この写真は、左手にパリ広場四番地、中央に同三番地、右手に同二番地の建物を映し出す一八八五年頃のものである。図六で収められた広場の様子と図七の様子が一致することを確かめられたい。

実際、一九〇〇年以前の撮影の写真では、パリ広場の地面に立つて、ブランデンブルク門の外翼越しに凱旋塔を眺めることができる（図八）⁽¹²⁾。図九は、その神女の像のクローズアップである。

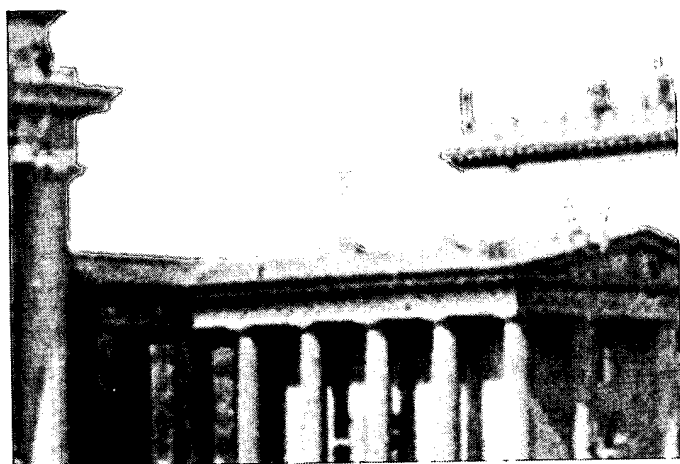
三 豊太郎はパリ広場にいた

すでに次のことは明らかであろう。鷗外は、ブランデンブルク門に面して、噴水や神女の像を感性的に把握しえたという事実である。したがって、合理的に考えるならば、『舞姫』の件のテキストを編んださいに、鷗外は、その作意はともかく、ブランデンブルク門における諸事物の配置状況を明確に了解していたわけである。

しかしながら、冒頭に紹介したように、このような明白な事態をあえて隠蔽する先験的な解釈態度もある。すなわち、「実際には見えないが、作中では見えるもの」として、鷗外が「目睫の間」の「景物」を扱っているとする「学術研究」の立場である。この立場は、「ブランデンブルク門の付近から眺めることはできても」



図八 プラテンデントルク門の見えるパリ広場（1900年以前）



図九 神女の像 (図八部分拡大)

と容認して、あえて事実の存在に自覚的に無関心であろうとしている点で、最強である。これに従えば、鷗外は、ウンテル・デン・リンデンやブランデンブルク門にある諸事物を事実とは無関係に叙述していることになる。

小泉は、前田愛が主張した「ウンテル・デン・リンデンとクロステル巷という、作品『舞姫』における二つの都市空間の対立」に込められた深い意味を読み解く。小泉によれば、前田流の「二つの都市空間の対立」の「深部」には、凱旋塔の女神像とエリスという女神という「二つの女神像が君臨する空間の対立という神話的構造」が秘められて

いるとされる(四〇)。しかも、小泉のこの主張は、「クロステル巷の古寺」のモデルをクロステル教会に同定する「殆ど奇跡的な符合」にまで跳躍する(四二)。

神話や奇跡を事としない「世俗的」な立場からすれば、もはやそうした主張は、聖なる信仰の自由、委ねるべき事柄かも

しれない。しかしながら、そのような信仰の果てが「クロステル巷の古寺」の「モデル」とい、きわめて世俗的な事柄にかかわろうとするかぎり、「世俗的」な立場からは、指摘しておくべきことがある。

小泉の立論は、前田愛が指摘した「遠近法の視角⁽¹³⁾」という「既に定説化され、疑われることのない『舞姫』論の不動の前提」を抜きにしては成り立たない。小泉は、そうした「不動の前提」には、ある意味では当然ながら一つの補足が必要だと考えた。すなわち、遠近法が成り立つ以上、それを成り立たしめる主観(太田豊太郎)の位置を確定し固定化しなければならないという独創的な発想である。ただし、「遠近法の視角」の妥当性は、主観の立脚点によってこそ検証されるだろう。

小泉の遠近法によれば、『舞姫』において叙述されるウンテル・デン・リンデンからブランデンブルク門周辺までの有様は、「近景、中景、遠景とも要約しうる、視線の移動に従って捉えられたもの」ということになり、これを捉える主観の位置は、「ブランデンブルク門から遙か東」のウンテル・デン・リンデンの「東外れに近い、王宮前のあたり」ということになる(三八)。

確かに、「維廉一世の街に臨める窓」は、ウンテル・デン・リンデンのほぼ東端、その三十七番地に所在するウィルヘルム一世皇帝宮殿(Palais des Kaiser Wilhelm I.)の執務室の隅窓(Eckfenster)であって、皇帝は、前を行進する衛兵をそこから眺めるのを常に



図十 ウィルヘルム皇帝宮殿 (1879年)

していたといわれる。⁽¹⁴⁾

図十は、その宮殿の一八七九年当時のものであり、その図版の解説では、「地上階の最左翼の窓は、『歴史的な隅窓』であって、そこから皇帝は、正午の衛兵交代パレードの際に姿を見せた」とされている。⁽¹⁵⁾したがって、『舞

姫』において「この大道髪の如きウンテル・デン・リンデンに来て両辺なる石だたみの人道を行く隊々の士女を見よ」とされるさいの「士女」の多くがこの皇帝宮殿を、目指していることに疑いはない。

しかしながら、このことは、豊太郎の現在位置を皇帝宮殿近辺に固定するための決定的な根拠を提供しない。それは、最大限好意的に見積っても、あくまで「士女」たちの目的地でしかなく、豊太郎の立脚点を特定しないからである。鷗外のテキストは、明示的に豊太郎が「欧羅巴の新大都の中央」に立っていると述べているが、このことは、その「中央」が皇帝宮殿近辺であることを保証しない。テキストには、「まだ維廉一世の街に臨める窓に倚りたまふ頃なりければ」とだけあって、高々時間が指定されるばかりで、場所的規定が与えられない。このような注意もあるのだろうか、小泉は、「著名な老国王ウィルヘルム一世の窓という設定」を、豊太郎の現在位置を決定するための主要根拠とはせず、傍証にとどめている(同)。

小泉が用意する主要な論拠は、「晴れたる空に夕立の音を聞かせて張り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交わしたる中より」と記述されるなかの「遠く望めば」の一句のみである。小泉によれば、この一句からこそ「最も自然」に、豊太郎の現在位置が皇帝宮殿前に設定されることになる(同)。

とはいえ、この「遠く望めば」の一句は、それ自体の意義によって了解されてはならない言葉だとみなされる。というのも、ウンテル・デン・リンデンの「東外れ」ならば、ブランデンブルク門すら見えないため、「遠く望む」というのは、小泉に従えば、それ自体の所作として考えてはならないからである。そのように考えるのは、「野暮の至り」だとされる。ブランデンブルク門をそのものとして望めない位置に立っても、豊太郎は、「ウンテル・デン・リンデンの千メートルに満たない全景のすべてを領略しうる」(同)とされるわけだから、「遠く望む」というのは、瞼の母と同じまったく観念的所作でしかありえない。

このような観念的遠近法にかかれば、近景はともかく、噴水などの中景も、ブランデンブルク門や凱旋塔といった遠景も、目撃できないなにかなのだから、おおよそ普通に通用するリアルな遠近法とは程遠い。むしろ、「遠近法」と呼ぶべきでないなかである。鷗外が「許多の景物目睫の間に聚まりたれば」というのも、観念的遠近法によれば、野暮くさく瞼を開けて眼前に展開する事態を表現したものでありえないから、鷗外は、言葉の「真の」意味で「目睫の間」に出来した超越論的事態を表現したことになる。これが、小泉のいう「物語の意志」というものである。

このような解釈手法は、おそらく法外な結論も引き受けざるをえないだろう。「遠く望めば」の一句は、豊太郎が観念的に「全景すべてを領略しうる」という「学術的」想定を基礎とするかぎ

り、もちろん百歩譲って豊太郎の現在位置を皇帝宮殿前に設定する理屈にもなるかもしれないが、むしろ帰国後の日本に設定する理屈として活用したほうがリアリティがあるともいえる。なにせ、鷗外は、『舞姫』を本邦で執筆したのであって、ウンテル・デン・リンデンで写生したのではないからである。

しかしながら、「遠く望めば」の一句は、コンテキストにおいて、ブランデンブルク門越しに神女の像を現象的に捕捉するものとしての明確な意味を担っている。「遠く望めば」の一句に、観念的に「全景すべてを領略しうる」などというコンテキスト上の無意味を混入させる権利は、学者といえども持ちえないはずである。

「遠く望めば」という一句をコンテキスト上そのもの自体で意味な語として解釈しきろうとする世俗の野暮な見方では、太田豊太郎は、今現在、ウンテル・デン・リンデン西端のパリ広場に立っている¹⁶。既に前節で示したことだが、神女の像は、遠く望んでようやく捉えられるものであった。そして、このウンテル・デン・リンデンの西端こそ、鷗外が描いた諸事物の全景すべてを現実的に展望しうる地点なのである。

『舞姫』において「欧羅巴の新大都の中央」とは、コンテキストと事実との整合的理解を試みようとするかぎり、「目睫の間」にブランデンブルク門を捕捉しうるパリ広場以外にない。豊太郎は、まずは東側に視線を送った。「士女」たちが広場からウンテル・デン・リンデンに入っていこうとしている。この広場を馬車が通り

過ぎている。豊太郎の視線は、次第に西側に移っていく。遠くを見やれば、ブランデンブルク門の彼方に神女の像が看取れる。豊太郎は、諸景物の展開に驚愕している。そして最後に、目の前の風景を遮断した。『舞姫』に記述されている野暮な事態は、かくの如しである。

このようなリアルな光景、これを前提に考えるならば、「遠近法の視角」という「既に定説化され、疑われることのない、『舞姫』論の不動の前提」なるものは、それが観念論として硬直化される運命をたどる以上、無意味な灰色の底に沈む。「実在の勝利の女神像を、ケーニツヒ広場から、ウンテル・デン・リンデンの西方、ブランデンブルク門の彼方に移しなす」(四二)という小泉的な——決して「鷗外的な」ではない——「学術研究」の実験操作の必要性は、微塵だになくなる。したがって、神女の像とエリスという「二つの女神像」を対立せしめる「仮想の直線」などは、研究者の虚構のみを根拠とする「信仰の直線」ではない。そして、その信仰の果てに突き当てられたクロステル教会が「クロステル巷の古寺」のモデルとなりうるかどうか、その答えは、良識の判断するとおりである。

四 小括

鷗外は、ベルリンの地に実際に足を踏み入れなかったのだろうか。

か。

もちろん、『舞姫』を小説として読むときに、読者は、その作者がベルリンの地を実際に取材したのかどうか無頓着でいることができる。それは、読者が作者を信頼しているからといっていいし、所詮、小説としてすべてが虚構たりうると低く見積っているからといっていい。

しかしながら、小説の背後に回って実際の都市空間との対応関係で鷗外の「取材」を考えようとするときには、評価基準がそれとはまったく異なってくるはずである。まず第一に事実を明確にし、それと小説というテキストとの距離を測る作業が根底に据えられるべきであって、先験的な「不動の前提」から観念論的に議論すべきことではないはずである。どうも、国文学的にはこの辺の作法が転倒することのほうが正統のようだが、現実にはベルリンの地に生きたことのある者の目からすれば、それは苦しい倒立に見える。

とはいえ、とくに小泉の議論には学的寄与が十二分にあったといわねばならないだろう。すなわち、「遠近法の視角」に対し主観の立脚点を明確にするよう筋論として迫ることによって、「すでに定説化され、疑われることのない」ウンテル・デン・リンデン東端からの「遠近法の視角」そのものをまったく成り立たなくしてくれたからである。

- (1) 森鷗外「舞姫」、『森鷗外全集Ⅰ』、ちくま文庫、一九九五年、十頁。
 なお、コンテキストを理解するうえで前後する箇所をたびたび参照することになるので、便宜を図ってそれをここに掲げておく。「余は模倣たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽靜なる境なるべく思はるれど、この大道髪の如きウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だ、みの人道を行く隊々の少女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に倚りたまふ頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせず走るいろ／＼の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて張り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔て、緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出たる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しもの、応接に違なきも宜なり。されど我胸には縦ひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動かさじの誓ありて、つねに我を襲う外物を遮り留めたりき」。前掲書、九—十頁。
- (2) 中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店、一九九九年、四五頁。なお、なにゆえ、「晴たる空に夕立の音を聞かせて」とある通り」ということが、「根も葉もないそらごと」の理由ないし傍証として挙げられうるのか、我々にはまったく理解ができない。鷗外は、隠喩を用いないほどの文才だともいうのだろうか。
- (3) 中井、前掲書、四四頁。なお、良識の察するところ、我々は、『米欧回覽実記』とのテキスト比較それ自体の意義を議論しているのではない。
- (4) 小泉浩一郎「鷗外「舞姫」の空間・再説——二つの地理的契機をめぐって——」、『近代文学 注釈と批評』第五号、二〇〇三年、三八頁。以下、参照に煩であるので、文中に頁数のみを記す。
- (5) *Situations-Plan, Haupt- und Residenz-Stadt Berlin und Umgegend*, bearbeitet von W. Liebenow, Berlin 1888.
- (6) „Das Brandenburger Tor, 1901“, Aufnahme von Waldemar Titzenthaler, in: *Unter den Linden, Historische Photographien*, hrsg. v. der Stiftung Stadtmuseum Berlin, Berlin 1997 (Abgek: UL), S. 126.
- (7) „Blick vom Brandenburger Tor auf die Linden und die östlichen Seiten des Pariser Platzes, 1884“, Aufnahme von F. Albert Schwartz, in: UL, S. 117.
- (8) „Blick von der Siegessäule zum Stadtzentrum, um 1880, Albumpapier“, in: *Berlin, Zwischen Residenz und Metropole, Photographien von Hermann Rüdwardt 1871-1916*, hrsg. v. Märkischen Museum Berlin, Berlin 1994, S. 42.
- (9) 一八八〇年当時、五十二ページで登るものが多かった。Vgl. *Berlin nebst Potsdam und Umgebungen*, Separat-Abdruck aus der 19. Auflage von Baedeker's Nord-Deutschland, Leipzig, Verlag von Karl Baedeker, 1880 (Abgek: Baedeker 1880), S. 67. 一八九六年当時も同様であるから、鷗外の滞在時における同額でもよい。Vgl. *Berlin und Umgebungen, Handbuch für Reisende von K. Baedeker*, Neunte Auflage, Leipzig, Verlag von Karl Baedeker, 1896 (Abgek: Baedeker 1896), S. 39.
- (10) ラチンスキー伯爵は、この地に帝國議会議事堂を新築するため、一八八四年に取り壊された。Vgl. UL, S. 42.
- (11) „Die Südseite des Pariser Platzes um 1885“, Aufnahme von F. Albert Schwartz, in: UL, S. 121.

- (12) „Pariser Platz mit Brandenburger Tor, Photograph unbekannt, vor 1900“, in: *Berlin, Frühe Photographien Berlin 1857-1913*, München 1984, S. 35.
- (13) 前田愛は、J・J・オリガスによる「遠近法の効果」の指摘を受け、「豊太郎のまなざしは、近景から遠景へと徐々に移動して行き、女神像の一点に収斂するわけであるが、これは遠近法の視角が作中人物の内面に導入された、日本の近代小説ではさいしょの試みといっている」という。前田愛『都市空間の中の文学』、筑摩書房、一九八二年、二二頁。前田愛は、「パノラミックな視角」「視野」ともいうのであり、「遠近法の視角」を超越する観点を有している。なお、オリガスの指摘する「遠近法の効果」は、本論で指摘した「観念的遠近法」とは無縁である。「物一つを見詰める。そして、その様々な物を見渡す。部分をしっかりとつかみ、全体を見ようとす。物の領略ができて、それを見渡すことに至って、ある調和が生まれる」。J・J・オリガス「物と眼——若き鷗外の文体について——」『日本文学研究資料叢書 森鷗外Ⅱ』、日本文学研究資料刊行会、有精堂、一九七九年、四六頁。
- (14) Vgl. *Becker* 1896, S. 54.
- (15) „Das Kaiser-Wilhelm-Palais, Unter den Linden 37, 1879“, Aufnahme von Hermann Rückwardt, in: *UL*, S. 43. なお、一八八〇年版のベデカーでは、「オペラハウスに近い一階の部屋に皇帝が居住する。旗が掲揚されると皇帝が在宅であることが暗示されている。隅窓から周知の写真が現実に現れる」。Becker 1880, S. 16.
- (16) このことは、太田豊太郎がパラシュートによってこの地に降り立ったことを主張するものではない。当然ながら、豊太郎は、鉄路でベルリンに着き、フリードリッヒ街駅 (Bahnhof Friedrichstrasse) からウンテル・デン・リンデンを通ったにせよ、ポツダム駅 (Potsdamer Bahnhof) からケーニヒグレッツァー街 (Königsrätzer-Strasse) もしくは

ウィルヘルム街 (Wilhelms-Strasse) を通ったにせよ、なんらかの経路でパリ広場にやってきたのであって、その間にえた印象が皆無であったと解釈すべきでないことは、常識に属する。ただ、国文学者のために、このことは記しておかなければならない。その解釈は、我々の課題ではないからである。

付記

本稿をなすにあたって、本学の山崎一穎教授より、一部、貴重な資料の提供を受けた。感謝してここに記しておく。